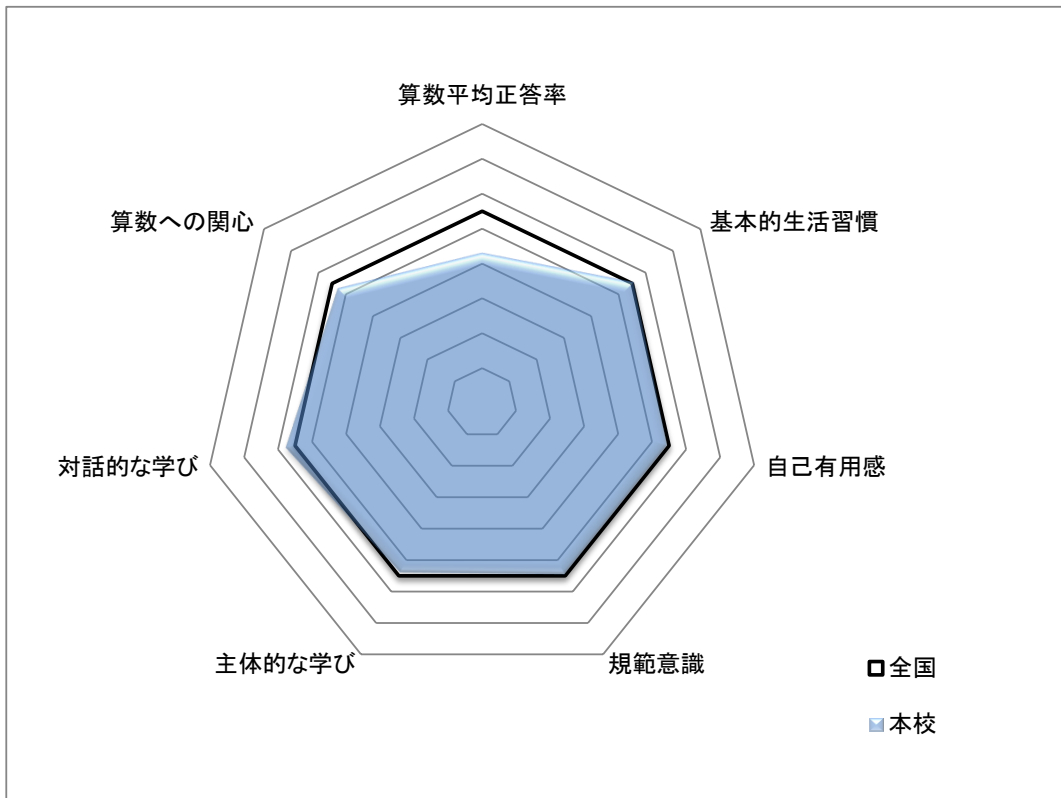


令和7年度全国学力・学習状況調査 結果分析表【算数】大杉第二小学校

各領域における、全国平均正答率及び、全国の肯定的回答合計値を基準とした場合の、本校の様子。



《チャートの特徴》

本校は、基礎の定着不足と文章量の多い問題への弱さが課題として表れている。計算の精度と読み取り・説明の力を高める指導の充実が求められている。さらに「データの活用」「変化と関係」「測定」「図形」「数と計算」に課題があり、複数資料の読み取りや数量の関係の理解、規則性の発見など思考が求められる場面でつまずきが見られる。既習事項の取りこぼしもあり、単位・角度・面積など基礎知識の不安定さが結果に影響している。計算の正確さや図を使った考察など基本技能の不足も課題であり、情報整理や根拠を示して解く力を育てる指導が必要である。

《家庭・地域への働きかけ》

本校では、ホームページを通して授業の様子や学習の取組を家庭に伝え、家庭学習の定着を図っている。また、杉ニGMキャンペーンを通して家庭での学習習慣の継続を支援している。さらに、地域の読み聞かせ活動や図書ボランティアの協力を得て、学校と地域が連携して児童の学びを支える環境づくりを進めている。学習状況調査のチャートでは、「算数への関心」「主体的な学び」「対話的な学び」などは全国との差は大きくない。家庭での学習習慣や学びの見通しをもつ力が学力の伸びと結びついていることから、家庭・地域・学校が一体となる取組を重視している。

《現状把握》

(AB層の割合と取組内容について)

本校では、算数の学力向上を学校全体の重点とし、年間を通して取り組む「学力向上プラン」を作成している。このプランでは、診断テストおよび定着度テストの正答率を、2～4年生は90%、5・6年生は80%とする年間目標を設定している。さらに、既習内容の定着度を学期ごとに分析し、定着の低い単元の原因を明確にした上で、朝学習や授業で定着を高める指導を計画的に行っている。学力向上プランでは、児童のつまずきの内容と支援方法を整理した指導計画を作成し、適切に支援できる体制も整えている。全校で課題を共有し、組織的に学力向上を進めている。

《学校の取組》

・教員の指導力向上

本校では、校内研究を中心に授業力の向上を図っている。ベテラン教員による師範授業を参観し、授業構成や児童への関わり方を学ぶことで、校内の優れた実践を共有している。また、国語・算数・体育・道徳の4教科で部会を組織し、教員が自ら選んだ教科で研究授業を行い、教材研究や授業づくりを深めている。部会での協働的な学びを通して、教員同士が指導力を高め合う体制を整えている。さらに、外部講師による研修を実施し、専門的な知見を取り入れながら授業改善を進めている。校内の学びと外部の学びを結びつけ、継続して授業の質を高めている。

・基礎学力の保障

基礎学力の定着を最優先の課題とし、「算数の達人タイム」を朝学習として週に一度実施している。達人タイムでは、ベーシックドリルの診断テストや江戸川区学力定着度調査を分析し、児童がつまずきやすい単元を明確にした上で、重点的な反復練習によって基礎力の向上を図っている。また、既習内容を丁寧に振り返る授業を計画し、理解の定着を確実にしている。必要な児童には個別支援や少人数での補充指導を行い、一人一人が「わかる」「できる」を積み重ねられるように環境を整えている。

・学習習慣の確立

江戸川区の「study week」や生活リズムチェックと連動した取組として「杉ニGMキャンペーン」を実施し、学校と家庭が協力して学習習慣を整える体制をつくっている。また、放課後の学習教室「EDOスク」では、2～4年生を対象に、個人カルテを活用して児童の苦手に応じた補習を行い、学習の基盤づくりを進めている。さらに、多読賞の設定や読書旬間、図書ボランティアによる読み聞かせなどを行うことで読書科の充実を図り、児童の読書習慣の確立を目指している。学校・家庭・地域が一体となり、安定した学習習慣の確立を図っている。

・AB層の育成

東京ベーシックドリルの診断テストや江戸川区学力定着度調査の分析から既習内容の定着度を把握し、AB層の育成に向けた指導を計画的に進めている。日々の授業では、各教室に配置したホワイトボードを活用し、児童が自分の考えを説明し、友達に分かりやすく伝える活動を取り入れている。説明する力の育成を通して、思考の深まりと表現の質を高めている。また、単元テストの直しや診断テスト・定着度テストの解き直しに取り組み、理解が深まった児童が友達に説明する学び合いを実施している。こうした活動により、A・B層の児童が主体的に学びを広げ、より高いレベルの学習へとつながられる環境を整えている。